

早いもので、この年次報告集も第5号となりました。そこで今回は、研究センターの開設当初の思い出を、少し振り返ってみたいと思います。

私たち、京都精華大学国際マンガ研究センターは、2006年11月に開館を控えた京都国際マンガミュージアムの運営を主な任務として、同年4月から活動を開始しました。有難くも、この2021年度には16年目を迎えることができたこととなります。

そのマンガミュージアムの開館準備で頭を悩ませたことの一つが、館に収蔵する資料のセレクトでした。そもそもマンガの雑誌や単行本のボリュームは膨大ですが、それに加え、作品の年代やジャンル、愛蔵版や文庫版などの種別、さらには、マンガの原画や評論・研究本などの周辺資料まで、検討対象は実に多岐にわたりました。はたして、どのあたりから手を付ければ良いのか、どんな相手からどれくらいの値で仕入れるのが適切なのか、それらを収蔵・公開するにはどれくらいのスペースが必要なのかと、理想と現実のあいだを行ったり来たりしながら、私たちは思案し続けました。

そうした折、研究センターの顧問に、文字通りの三賢人が就任されることになりました。現代マンガ図書館館長の内記稔夫さん、マンガ史の研究者・収集家の清水勲さん、評論家の呉智英さんです。私たちは大変勇気づけられました。結果的に、この日本を代表するマンガの収蔵や選書のプロによるご指南のおかげで、館のアーカイブポリシーが定まり、昭和期に発行されたマンガの雑誌・単行本を中心に、約20万点の資料群を擁してスタートを切ることができました。

あれから丸15年。現在の京都国際マンガミュージアムでは、30万点を超える蔵書に拡充するとともに、数万点におよぶマンガを国内外の施設に寄贈したり、文化庁の事業を通じて全国の関連機関との連携を進めたりと、「マンガのアーカイブ」に関する国際的拠点の一端を担うポジションにまで成長しました。

ただ、その間に、哀しいお別れもありました。内記さんが2012年に、そして清水さんが昨2021年に、それぞれ泉下の人になったのです。お二人のご尽力には、どれだけの謝辞を並べても足りません。個人的な思い出として、マンガミュージアムの開館にあわせる形で、お二人と秋田孝宏さん、そして私の四人で、京都新聞にマンガに関する記事を連載し、それを基に共著『マンガの教科書——マンガの歴史がわかる60話』（臨川書店、2008年）を出版したこともありました。まさしく光栄の一語ですが、今となっては、清水さんと内記さんとの最初で最後の共著となりました。

なお、清水さんのお仕事やご経歴については、追悼の催しとして2021年3月に実施したオンラインシンポジウム「マンガ史研究者・清水勲を受け継ぐ」で、宮本大人さんと新美琢真さんが詳細かつ的確に報告してくれました。その貴重なレポートは今号に掲載した通りですので、何卒ご覧いただき、在りし日の清水さん